審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	（乙）第 2793 号	氏名	髙橋　宏樹
審査担当者	主　査　嘉村敏治 (印) 副主査　清川兼輔 (印) 副主査　淡河悦代 (印)		

主論文題目：　Usefulness of endoscopic breast-conserving surgery for breast cancer
（乳癌に対する内視鏡下乳房温存術の有用性）

審査結果の要旨（意見）

本研究は乳がんに対し、鏡視下に皮切を小さくして病巣を周りの乳腺、脂肪組織を付けて切除する方法に関して、安全性、整容性を従来の historical control と比較した feasibility study と位置付けられる。従来の直視下の手術法に比べて、手術に関する安全性に関しては、手術時間は長くかかるものの、術前術後における炎症に関するマーカーの変化、出血量や摘出した標本のなかの腫瘍部からのマージンの長さに有意差はなかった。一方で本研究の Primary endpoint である整容性については、患者、医師ともに鏡視下手術は直視下手術よりも満足度は有意に高い結果が得られている。今後は適応症例を明確にし多施設による鏡視下法の予後も含めた評価が行われ、本法が乳がん手術のオプションとして位置づけられることが期待される。

論文要旨

我々は 2009 年より乳癌に対する内視鏡補助下乳房温存術（鏡視下手術）を行っており、多くの症例で良好な整容性を得ていると同時に乳癌の根治性も従来の術式（直視下手術）と遜色ない結果となっている。

我々が施行した鏡視下手術 100 症例と同時期に施行した直視下手術 150 症例を対象とし、研究を行った。術式は適応のある患者には両術式の説明を行い、患者に選択させ、安全性（出血量と手術時間、合併症の有無）、手術侵襲の程度（術前後の炎症性サイトカイン IL-6 など）、整容性（患者満足度調査）の検討を行った。

両群間で出血量に有意差は無く、重篤な術後合併症も無かったが、手術時間では鏡視下手術群が平均 19 分の延長を認めた。手術侵襲の程度は全ての項目で術前後に有意差は認めなかった。整容性は術後外来で行った患者満足度調査で「創部の状況、陥凹、乳房の形」の項目で鏡視下手術群が有意差をもって高い満足度を得ていた。また 2012 年 10 月現在で両群ともに局所再発症例は認めていない。

この研究で鏡視下手術は直視下手術と比較して安全性や手術侵襲の程度に差は認められず、整容性の面でも直視下手術より満足度が高かったことから、今後乳癌に対して有用な術式となり得ると結論づけることができた。